

## 小林一茶の「七番日記」に見る蕎麦切り

江戸蕎麦(旧寺方蕎麦)研究会

小林 尚人

### はじめに

俳人小林一茶(1763～1829年)は、縁あって馬橋(現流山市)の俳人大川立砂(～1799年)に巡り合い、寛政2年(1790)立砂の紹介で葛飾派(江戸で有力な俳諧の一派)の宗匠溝口素丸(1713～1795年)に入門した。勤勉で几帳面な性格に加え生来の文学的才能が認められたのであろう、1年も経ずして執筆(宗匠見習い)に抜擢された。一茶はすっかり俳句に魅せられ、早く宗匠として身を立てたいと考えた。しかし、当時江戸には身分制度があり、武家・豪商・豪農あるいは僧侶でないと、農民出身でしかも遊民のような一茶では宗匠になることは難しかった。そのうえ身なりには全く無頓着であり、『我春集』に自らを「信濃国乞食首領」と自嘲的に署名している。なおかつ、江戸の下町暮らしや町人が尊ぶ「いき」の風潮にはどうしても馴染むことができず、加えて葛飾派の俳風と派内の人間関係の事情が分かってくると嫌気がさしてきたようである。その心境を《いざ去なん江戸は涼みもむつかしき》と詠んで、江戸に見切りをつける決心をしたようである。将来のことを考えて、文化9年(1812)50歳のとき故郷柏原に帰り、取り敢えず岡右衛門の家を借り仮住まいとした。未解決になっていた遺産相続の問題も弟仙六と話がつき、52歳のとき母方の縁者である常田キクと結婚し、念願の家庭を持つことができ《これがまあついの栖か雪五尺》と詠んでいる。俳諧の方も「俳諧寺一茶」と称し一門の一茶社中を成すことができた。

### 検討事項〈蕎麦切り〉

一茶は、詠んだ句を几帳面に句帖に記しているが、中でも『七番日記』は一茶調の最盛期と言われる文化7年(1810)正月(48歳)から同15年(1818)末(56歳)まで、9年間に詠んだ句8,000余が記されている。句帖は、上段に年月日、晴雨の天気、その日の行動や見聞等を略記し、日記としても最大級のものである。下段には、その月々の作句(時には先人・知人の歌句)が記録されており内容も充実したものである。今回は、「七番日記」の記述の中から蕎麦切りに関する6件に注目し、関連がある事項を加え検討することにした。なお、小見出し6項目の『』内は句帖の記述である。

#### ①文化八年五月 『廿九晴 瑞善院そば 恵二』 (1811年 49歳)

このころは富津の大乗寺で世話になっていたところで、煙管の掃除に竹ひごを通したところ抜けなくて、歯で噛み抜こうとしたところ、残っていた1本の奥歯が抜けてしまい、完全な歯なしになったころであろう。日記には「瑞善院そば」とあるが詳細は不明である、たぶん蕎麦切りと思われるが、日時が5月29日とあるから前年収穫されたそばであろう。

#### ②文化十三年正月 『五晴 隣夕蕎麦二人行』 (1816年 54歳)

お隣の仙六宅から夕飯にお招き頂き、妻キクと二人でうかがい蕎麦をご馳走になっている。蕎麦とは蕎麦切りのことであろう。奥信濃では、正月は深い雪に閉ざされて外仕事は何も

できない。そのため部屋に籠って、石臼を回してそば粉を挽く暇は充分ある。今年収穫したソバを挽いたそば粉で、薫り高い蕎麦切りを食べることは、農家にとっては至福のご馳走である。仙六は、お隣の一茶夫婦に声をかけ、蕎麦切りをご馳走にして兄弟とその家族が揃ってお正を祝ったのであろう。

③文化十三年閏八月 『廿晴 蕷汁 隣ヨリ得新蕎麦切』 (1816年 54歳)

今回は、お隣から芋汁と新蕎麦切りを頂戴している。新蕎麦切りとあるから、今年の新そば粉で打った待望の蕎麦切りであり、芋汁も採りたての芋で作ったものであろう。8月は野良仕事が忙しい時季である、だから家に招いてゆっくりご馳走する暇はない、しかし、香り豊かな新蕎麦を早くご馳走したいと思うのが仙六の人情であろう、そのことを充分承知している仙六の妻が気を利かせたのではないか。また、信州で新蕎麦と言える期間は収穫した年の年末までとされ、蕎麦が美味しく食べられるのは翌春の彼岸までである。ソバの実は、春の陽気が暖かくなると変質し味が落ちるからである。

◇江戸時代前期の農書に『百姓伝記』(注)がある。その巻十四「万<sup>よろず</sup>糧<sup>かてしゅう</sup>集」に、そばの調理法として『そばを<sup>かて</sup>糧<sup>かて</sup>に用ゆるに色々<sup>ごしらふ</sup>様々に<sup>でんぶ</sup>拵<sup>でんぶ</sup>やう有ものなり。そばきりは田夫のこしらへ喰ふものならず。其外<sup>ぶじき</sup>夫食<sup>ぶじき</sup>にするに手まはしよく徳あり。荒くひきわり、つきわり、五穀・雑穀に合して食に焼てよし。其外そばがきと云て湯にてねり喰ふ。そばもちにしてもよい。徳多きものなり』と記述されている。要約すると[そばの食べ方にはいろいろな方法がある。しかし、そば切りは百姓が作って食べるものではない。百姓は粗く挽き割ったり、搗き割ったりして、五穀や雑穀と混ぜて炊くとよい、そばがきといってそば粉を湯で練って食べると旨いものである。そば餅にしてもよく、そばは有益な作物である。]とすることであろう。

注目すべきことは、「そば切りは百姓が作って食べるものではない」と、断定的に明記した上で、そばは有益な作物であると決めつけている。そのうえで蕎麦切り以外にいろいろな食べ方があることを示し勧めている。何故、百姓は蕎麦切りを食べてはいけないのか。それは、農家が自宅で蕎麦切りを作るためには、準備から後片付けまで大変な手間・閑が必要であり、なおかつ蕎麦切りは、大変旨いからつい沢山食べてしまい、それが癖になってしまう。しかし百姓は、万民の食料となる農作物を作る大事な本務がある。それを蔑ろにして自分たちが楽しむ蕎麦切りのため、農作業に大事な時間を割いてはならない。だから、蕎麦切りは、農作業に忙しい百姓は食べてはならない。それよりも百姓は、簡単に作れる蕎麦雑炊や蕎麦飯などを食べるのがふさわしい食べ方である。と、あたかも親切丁寧に勧めているが、これが封建時代の現実の姿だったのであろう。かつて封建時代の初期には、領主が百姓から年貢を取り立てるために、百姓は「生かさず、殺さず」と言われたようである。「農書」はどうやら百姓は年貢を納めことのみ専念すべきである。とする封建領主側の立場で書かれた指導書ではないか。敢えて見方を変えて見れば、当時蕎麦切りはよほど旨い食べ物でご馳走だったに違いない。

(注)『百姓伝記』は全15巻から成る大変優れた農業指導書と言われている。江戸、元禄時代(1688～1703)以前の著述と推定されているが、著者も刊行年も不詳である。現在の東海地方(静岡県から愛知県)の農業に重点をおいていることから、農耕に経験が

あり農事に詳しい武士が、先人の農業巧者の言い伝えを基に、自らの経験と観察を含めて編集し記録したものであると言われている。内容の詳細は省くが、農作業の範囲を超えて、気象・治水・用水などから生活にまで及んでいる、また、具体的耕作法も耕作者の立場で書かれている。しかし、写本だけが伝わったために広くは流布しなかったようである。蛇足ながら、「百姓伝記」の刊行から遅れて1697年『農業全書』が出版され、それからおおむね半世紀後の1751年に、日新舎友蕎子の『蕎麦全書』が脱稿されている。

④文化十五年正月 『三雪 隣夕蕎麦 菊女二人逝』 (1818年 56歳)

正月3日、お隣から夕飯に蕎麦のお誘いを頂き、キクと二人でご馳走になっている。どうやら仙六の妻は、蕎麦打ちが得意だったと思われる。今は昔の話になるが、信州のソバ作農家では、嫁入り前の娘には、躰けの一つとして蕎麦打ちの技を教える習わしがあり、近年まで続いていたようである。

翌4日の条に「四晴 夕蕨汁 隣三人招ク」とある。今度はお隣の三人(継母、仙六と妻)を招いて、芋汁を振舞っている。前日蕎麦をご馳走になったお返しであろう。しかし一茶は、地主でありながら農地は全部小作させ、年貢だけの農家である。ところが妻キクは、農家の出身で大変働き者であり、家事の暇をみては、実家や二の宮(一茶の母の実家)あるいは本陣へお手伝いに行っている。だから芋汁の芋はそのお礼に頂いたものではないか。

◇ 子どものころの一茶は、継母とは折り合いが悪く、おれを江戸へ奉公に出したのは鬼ババア・継母のせいだ。と、継母を恨んでいた。しかし、古郷に帰って所帯を持ってからは、お隣の仙六や継母と一つ屋根の下で暮らすようになって、円満にお付き合いをするようになっていく。多分キクと仙六の妻が陰で何かと気をつかっていたのでは無いかと思われる。また、日記には「廿一晴 墓詣 隣旦食」と、墓参の記述が目につく、21日は父の月命日である。外歩きのおおい一茶であるが、父譲りの熱心な在家仏徒であり、在庵時は必ず早朝の墓参りを欠かしたことがない。農事で忙しい仙六の代参を兼ねたのであろう、墓参後は必ず仙六宅に立ち寄り、朝食をご馳走になっている。

⑤文化十五年正月 『廿晴 花仏来泊 ソバ切』 (1818年 56歳)

西国の俳人花仏が来訪し宿泊している。かつて一茶が西国行脚の折お世話になった恩人であろう。恩返しに信州名物の蕎麦切りをご馳走したようである。翌2月1日の条に「一晴 花仏飯」とあり、1日に帰ったようである。さて、ご馳走した蕎麦切りは誰が打ったのであろうか、やはりキクと考えるのが自然であるが、キクには蕎麦打ちに関わる記録が無いので分からない。しかし、この正月にはお隣で蕎麦切りをご馳走になって、仙六の妻の蕎麦打ちの腕前は充分わかっている。一茶は、世話になった遠来のお客のため、最高の蕎麦切りをご馳走しようと考え、蕎麦打ちの上手な仙六の妻にお願いしたのではないかと考えられる。

⑥文化十五年八月 『十晴 夜本陣夕蕎麦 キクト二人』 (1818年 56歳)

本陣から夕食のお招きを頂き、キクと二人で蕎麦をご馳走になっている。何分、村で一番格式ある本陣から、夫婦そろってお招きを頂いたのである。何故であろう。北国街道の宿

場柏原は、旅人が利用する宿であるとともに、荷物は伝馬屋敷へ手数料を払うルールがあった、そのため荷物は、傳馬屋敷に寄託すると宿場ごとに引き継がれていた。したがって北国街道三宿（柏原・古間・牟礼）では、伝馬役金を納めその任に当たっていたのである。ところが、北国街道の東に裏道ともいえる川東道があり、荷物がその裏道に流れることがありその量が増えてきたのである、そのため三宿の荷扱いが減少し死活問題になった。そこで三宿が原告となり、文化2年（1805）8月「川東道付通し禁止」を江戸道中奉行へ訴え出たのである。一度は敗訴したが再度提訴し、文化10年に勝訴するまでの間、本陣の中村六左衛門をはじめ村の役員が頻りに江戸へ出府していた。文化8年（1811）中村六左衛門が独りで出府した折りのこと、突然病のため宿で臥せってしまった。そのとき江戸に居た一茶は、直ぐ留守宅へ手紙で病状を知らせるとともに、宿に泊まり込んで親身になって看病したのである。それ以来六左衛門は、一茶に恩義を感じるとともにすっかり人柄を見直し、親しくお付き合いするようになっていた。

### むすびにかえて

一茶は、故郷に定住して7年が過ぎたころの文政2年（1819）57歳のとき、「七番日記」の延長ともいえる日記体裁の句集「おらが春」を纏めている。その中に「**おのが味噌のみそ臭さを知らず**」と前書をして《**蕎麦の国のたんを切りつゝ月見哉**》と詠んでいる。（「たん」とは、啖呵を切る、大言壮語する意）信濃者はつい手前味噌で、信濃の蕎麦こそが一番旨いと自慢して啖呵を切る。そんなことを江戸の町人などに言えば「蕎麦の自慢はお里が知れる」と蔑まされるだけだ。そもそも、蕎麦の旨さは「そばが半分、汁が半分」と言われるように、江戸の蕎麦の方が汁を含めはるかに旨い。一茶はそのことを充分知っている。しかし、今は村人たちとお月見の宴の最中である、その席で江戸の蕎麦の方が旨いなどとは言えない。だから一茶も一緒になって、この蕎麦はうまいうまいと調子を合わせていたのである。地域にもよるが信州では、お祭りやお正月あるいは婚礼などハレの宴席では、最後を蕎麦切りでしめる習わしがあった。

- ◇ 江戸時代中期の俳人と謝蕪村（1716～1783年）は、「洛東芭蕉庵にて」と前書きして《**そばあしき京をかしくて**徳麥哉****》と詠んでいる。蕪村は59歳になって、洛東・金福寺の境内に芭蕉庵を再興しているが、この句はその芭蕉庵で詠んだものである。蕪村は20歳のころから36歳で京都へ移るまでおよそ15年間、江戸を中心とした関東地方で画と俳諧の修行をしている。そのため江戸蕎麦の味は良く知っていたようである。また、「江戸のそば、上方のうどん」という言葉があるように、東西では味の嗜好が違うようである、どうやら京は蕎麦を嗜むには適さないようだ。
- ◇ 江戸時代の三大俳人の一人、松尾芭蕉（1644～1694年）は俳聖とも言われている。その芭蕉の門人十傑の一人である各務支考（1665～1731年）が著した、『十論為弁抄』の著作の中に『**むかし嗟峨の落柿舎にあそびて、談笑のついでに、都には蕉門の稀なる事をなげきしに、故翁は例の笑ひ笑ひ我家の俳諧は京の土地にあわず、そば切の汁のあまさにもしるべし。のからみのすみやかなるに、山葵のからみのへつらいたる句さへ例の似而非ならん。此後に丈夫の人ありて心のねばりを洗いつくし、剛からず柔ならず。俳諧は今日**

の平話なる事をしらば、はじめて落柿舎の講中となりて箸箱の名禄に入べしぞ。』とある。又、芭蕉は『我家の俳諧は京の土地にあわず、そば切の汁のあまさにもしるべし。』と笑いながら言ったとある。このことについての解説は、江戸ソバリエ協会、江戸ソバリエ認定委員長ほしひかる氏が、同協会のHPに『蕎麦切 芭蕉庵～夢は枯野をかけ巡る～』と題した論調を掲載されている、したがってここでの説明は省略する。しかし、蕎麦の味には水が大きく関わっているようであり、江戸蕎麦が美味いと町人に広く親しまれるようになった時期と、関東の濃い口醤油が安価で出回り蕎麦汁に使われるようになった時期が、深く関わっているように思われる。

以上

#### 『参考文献』

- 「一茶全集」 信濃教育研究会編集 信濃毎日新聞社発行
- 「一茶 七番日記」 丸山一彦校注 岩波書店発行
- 「一茶 父の終焉日記 おらが春」 矢羽勝幸校注 岩波書店発行
- 「蕪村俳句集」 尾形竹校注 岩波書店発行
- 「百姓伝記」上・下 古島敏雄校注 岩波書店発行
- 「農業全書」岩波文庫版 岩波書店発行
- 「蕎麦全書」伝 日新舎友蕎子著 新村繁校注 藤村和夫訳解 ハート出版発行
- 「蕎麦切 芭蕉庵 ～夢は枯野をかけ巡る～」 ほしひかる著 江戸ソバリエ協会

(2022. 8. 16)